

平成 28 年度 山形県産業教育審議会議事概要

日時：平成 28 年 10 月 28 日(金)

14:00～16:00

場所：山形県庁講堂

○出席者

会 長：長谷川 吉茂

副会長：横山 正明

委 員：板垣 巖、伊藤里香子、井上 弓子、大山由起子、國眼眞理子、
齋藤 幸子、齋藤 直樹、佐藤洋詩恵、菅野希和子、高橋菜穂子、
那須 重義

○欠席者

委 員：今田 裕幸、澁谷 忠昌

次 第

1 開 会

(1) 県教育委員会あいさつ

(2) 会長あいさつ

(3) 委員の紹介

2 報 告

(1) 本県高等学校における産業教育の現状について

(2) その他

3 協 議

社会の変化に対応する産業教育の在り方

4 閉 会

以下 3 協議

<那須委員>

事務局の説明をお伺いし、関係各位がしっかりと目的と計画性を持って取り組んでいたことに感謝申し上げたい。

情報化の進歩の中で、ネットを開けば何でも情報が手に入る時代にあって、教育をもう一度原点に立ち返って見直す時期であると考えている。ネットはつながっているが人の心はつながっていない。最近子どもさんたちに話をしてもメモを取らなくなった。話の中で重

要な点はどこなのか見えていないことが理由と考える。我々の時代は、黒板の中身を書きながら写しながら、先生の話聞きながら、身に付けてきたものだが、今は写さない生徒さんが多いように思う。そのような点からも、生徒さんたちの学びというものを考えてほしいと感じる。

6 教振における産業教育の在り方の中で、イノベーションに対応した工業教育というものがあるが、革新や改革を進めるには、心にゆとりが必要であり、そこから自分に気づくことが大切である。物事に気づくことができなければ新しいものを見つけることができない。言われたからやるのではなく、自ら進んで物事に対応する気持ちを持つ必要があり、そのような教育を行うことが重要と考える。

今朝の新聞にいじめの問題が報じられていた。山形県のデータでは1,000人に対して50人がいじめを受けているとあった。情報化が進み、先生と生徒、地域がコミュニケーションを取れない状況になっている。話し方が下手、聞き方が下手なためにコミュニケーションが下手ということにつながり、人間関係にも大きく影響を及ぼしている。そのような意味からも、様々な分野において話し合いを行う機会を多く持ちながら、お互いの立場を尊重し合うような教育を行っていただければと感じる。一番大事なことは心であると思う。心が豊かでないと明るい未来は創れない。もう一度原点に立ち返って心を育てる教育を行っていただきたい。

<横山委員>

本年、経団連が会員企業に「求める人材」についてアンケート調査を行った。その結果によると、知識、技術、技能などは入社後でも身に付けられるので、それよりも明るく元気ではきはきとものが言える若者、さらに積極的で意欲的でやる気のある人材を望んでいるという意見が多かった。明るさや元気などはその人の個性といえるが、育った環境、特に家庭環境が大きく影響していると考えられる。学校教育でも、個性や人間性を大きく変えられると思う。家庭や先生方が明るく元気に生徒に接することが個性や人間性を豊かにするためには重要であると考えられる。

この夏のリオオリンピックほど、最後まで諦めない心、強い精神力を日本選手が発揮してくれた大会はなかったと思う。バドミントン女子ダブルスの高橋・松友選手の決勝戦は残り2点からの逆転金メダル、レスリング3階級の登坂、伊調、土性選手の3選手は全てが残り数秒から十数秒の間の逆転金メダルであった。これらの事例を含めて日本選手はあらゆる競技で強い精神力を見せてくれた。これは、勉強や仕事においても最後まで諦めない心、強い精神力が大切であることを教えてくれている。日本の高校生は理数系の科目を苦手としているが、これは論理的に粘り強く考える思考力が不足しているからと感じている。克服するためには、家庭や学校で論理的に粘り強く考える思考力を育てる必要性を感じている。何事にも、強制したり失敗しないように取組ませるのではなく、やる気と興味

を持つまで気長に待つことが大切である。したがって保護者や先生方にも生徒がやる気を出すまで待つ精神力、忍耐力が必要となる。生徒がやる気を持てば自然に目的意識を持ち目標を立て積極的に勉強やスポーツに取り組むようになる。その後は、山形にいる優秀な指導者に任せればいいのではないか。

技能五輪全国大会において、山形県選手は金賞が3人、銀賞が6人、銅賞が8人など合計31人が受賞してくれた。また団体では愛知県、茨城県に次いで3位の成績であった。その中で、古窯の佐藤江里子さんは金賞を受賞されたが、挑戦6回、去年は銅賞に輝くも、金賞目指して取組んでこられたとうかがい、佐藤さんの精神力、意欲に敬服している。産業技術短期大学校においてもウェブデザインで松田敦司君が銅賞に、ITネットワークシステム管理では高橋晋也君が敢闘賞に輝いてくれた。松田君は山形工業高校出身、高橋君は酒田光陵高校出身であるが、勝因は、本人の努力の賜物であることは間違いないが、加えて産業技術短大と山形工業、酒田光陵との連携協力が効果を発揮したことである。このような日進月歩で発展する分野では、高校と短大あるいは大学などが協力連携することが重要であると考え。酒田光陵と産業技術短大庄内校はカリキュラム連携による高大一貫教育を行っておりスムーズな接続教育を実現している。さらに、高校と大学や短大だけでなく、県の研究機関や企業の研究機関との連携によって、高校生は最新の高度な技術あるいは研究内容に触れることができ、キャリア教育の充実にもつながるので積極的な協力連携を進めていただきたい。事例として鶴岡市にある慶応義塾大学先端生命科学研究所では高校生、高専生を研究助手や特別研究生として受け入れ、研究に従事させるような事業を実施している。企業は産業構造の変化や技術の動向に敏感なので最新の機械設備なども備えている。それら最新の情報や技術に触れることは高校生や大学生が実践的な力を身に付けるためには必要な支援であると感じている。

最後に、産業技術短大の情報システム科は大変人気があり、優秀な生徒が多く入学してくる。しかし山形県には情報系の企業が少なく、受け皿がない状況で卒業時に関東圏に就職する生徒もいる。県内にももう少し情報系の企業が欲しいと感じている。生徒には日ごろから希望する受け皿がない場合は、自分で受け皿を作りなさいと教えている。しかしベンチャーを起業するような元気な生徒はまだ出てきていないようだ。山形銀行さんが創立120周年記念事業で山形創生ビジネスプランを募集された。アイデア部門大学生の部で最優秀賞に産業技術短大2年の太田・阿部両君のプランが選ばれた。実現可能なプランに対してはご支援いただきたい。さらに産学官連携のもと県を挙げて若い起業家を育成するような教育支援をお願いしたい。

< 齋藤幸子委員 >

現在、認知症が大きな問題となっている。多くは高齢になってからのものであるが、たとえ認知症になったとしても、生きていてよかったと感ずることができるよう介護の在

り方を常に考えている。福祉先進国の状況を見ると福祉機器の発展を強く感じる。車いすを見ても、座った時に一人一人に合った姿勢をしっかりと保たれるようなクッション機能が充実したものがある。その人専用の車いすということになるが、その車いすを使うことで、本人のストレスが解消され心地よく快適に日常を過ごすことができている。このように機器としての発展は今後も進んでいくと思われるが、果たしてそれだけで良いのかと考える。介護する人間が情緒豊かで感性豊かな人間でなければならないと考える。そのような人間でなければ教育長の話された「しなやかな対応」というものができないのではないかと思う。介護される人に寄り添うことができる、相手の立場に立って物事を考えることができる人材というものが今後重要とされてくると感じる。山辺高校で教えているが、生徒たちは純粋に学ぼうという姿勢をもっていて、そんな生徒たちにどのような教育を施せば、情緒豊かな感性豊かな人間に育つのかを考えている。若いこともあり、物事の見方、考え方に非常に柔軟さを持っているこの時期にコミュニケーション能力を高めることが、複雑化する人間の心に寄り添うための人材となるためには重要であると考えている。

介護の世界において離職の原因の中に腰痛があるが、その部分を補うような介護ロボットの開発も進んでいる。ペッパー君というロボットがあるが、愛くるしい表情と声を持っているが、毎日ロボットに介護された場合どのように感じるかと考える。やはり生身の人間は、日によって声の質も違い、着ている物も違い、日々の変化によりその温かさを感じ取れるのではないかと思う。その意味からも人間性豊かな人材を育てることが重要になると考える。

<井上委員>

事務局の報告で、第6次山形県教育振興計画で様々な取組みをされており、高校生は視野や選択肢が広がり大変幸せだと感じた。さらに事業を進めていただきたいと思う。

本日の協議にI o Tに関する事柄が含まれていたもので、山形県のものづくりを下支えする関連企業として、自社の社員に聞き取りをしてきたところ、メーカーや関連会社でも、I o Tに関しての導入については、まだ入り口に差し掛かったばかりとの認識であった。今後必要になってくる分野でもあり、当然導入されてくるものと捉えていた。

過去においても1990年代にパソコンが出てきて20年が経過した。当時からは想像できない程進化してきている。ここから20年後はさらに発展し、I o Tが主流のものづくりの現場に進化していくものと思っている。しかし足元を見てみると、県内の中小企業は99.8%を占めているがI Tそのものが進んでおらず、国としても補助金を出して普及させることを考えている。なぜ進まないのかを突き詰めると、一番の理由が「できる人がいない」というものであった。入力操作はできるが、それだけではI T化は進まない。会社にとって何が優先されるべきことなのか、何が課題なのかを見極め、どこをI T化すれば効率が上がるかを考える能力が必要とされている。気づく人材、解決する能力のある人材、

言い換えると技術だけでなく人間性の部分が必要とされている。新聞や本を読んで様々なことを考え感じられる力が、就職後に会社のためを考え行動できる人材につながると考える。

ビックデータに関しては、会社のデータを蓄積し始めて7、8年になるが、ITに強い社員がいたので、そのデータの蓄積から分析し、最適な在庫、売れる商品など数値化してくれている。入力操作だけでなく、考え分析ができる人材がいることで大きな差になってくると感じている。

これから20年先を考えると、大きく変化した世界になっていかもしいが、今の高校生はその頃30代後半となり、世の中の中核となる年代でもあるので、様々なデータを分析できる「考える力」をつけることを教育の中に取り込んでほしいと思う。

<國眼委員>

大学でキャリア教育を支援している立場からお話したい。キャリア教育という言葉が使われ始めたのは1999年で、今年で17年目になる。先ほど那須委員から、「ネットからの情報はすぐ手に入れられるようになったが、人と人の関わりから知識を得たり知恵を頂戴する機会は減っている」との御指摘があったが、私たちも日ごろの教育の中で感じている部分である。何か調べ物を依頼すると、ネットから情報を入手し、そのままコピーを提出するような状況で、人と人との関わりが不足していることは確かである。第6次山形県教育振興計画の柱の中にもコミュニケーション能力の育成というのがあるが、コミュニケーション能力という言葉を見ると、自分の考えを表現する、相手に伝えることに重点を置きがちである。同じように相手も伝えたいと思っている訳なので、聞く力というのも大事になってくる。先日、高校で話をする機会があり、先ほどもあったように、メモを取りながら聞いてみないかということをお話した。すると、「メモを取りながらだと、話が聞けません。」と率直に言ってくれた生徒がいた。自分がわかる程度できれいな字でなくてもいいので、後で思い返せるようにとどめておくことは大事である。人間1時間経つと4割から5割程度忘れてしまうものなので、聞いた情報を知識として生かす、そんな能力が必要と感じる。大学でキャリア支援をしているので、企業の方ともいろんな話をするが、その中で周りの人間と協働できる人材が欲しいと言っている。協働するには、言われたことをやるだけでなく主体的に動くことや、人の話を聞くなどの能力が必要となる。小中高のキャリア教育を各教科の中でどのように教えていくかが重要となる。課題を見つけ、見つけられない場合は課題を与えてもいいと思うが、その課題を解決するためにどんな情報を集め分析し自分に何ができるかを発見していく学習の蓄積が大切であり、アクティブ・ラーニングが重要とされているが、教え込むのではなく自ら課題にチャレンジしていく、そんな力を各教科の中で身に付けていくことが必要である。山形県内でも様々な事業が展開され、心強く感じているところである。その中でインターンシップ推進事業があり、職業系の高

校は従来から進められていたが、普通科の高校生のインターンシップについては課題とされていた。就職希望の多い普通高校で34校の実施となっており大変評価できる部分である。ここに参加された生徒が4,188人と表記されているが、何%に当たるのかお伺いしたい部分である。大学でもインターンシップは盛んに行われており、1日から数か月に及ぶものまで様々あるが、参加している割合はわずか2.8%にすぎない。各大学でも単位化したり推進のための旗は振られているが非常に参加割合は低い状況にある。そのような背景もあり高校の参加率というものが気になったところである。インターンシップというのは、自分の目で見て耳で聞いてという直接見聞きするいいチャンスであり、これから自分が何を学ぶべきなのか、何が不足しているのか肌で感じ取れるいい機会であるので、特に普通科高校を中心に引き続き推進していただきたい。

<菅野委員>

諦めない精神力をスポーツ少年団などで培いたいというお話があったが、障がい者スポーツの中でテニスの指導をするカリスマ指導者の話を聞いたことがある。勝つことは前提であるが、負けることは勝つために踏まなければならないステップであると教えていた。なぜ負けたのか自分で振り返り、次に向かうための経験であると指導した時、生徒たちは目を輝かせ次へ向かう姿勢を示したと言っていた。諦めない心、思いやりの心を育てるとは、子どもに押し付けても育たないし家庭を巻き込んで親を巻き込んで育てていく必要がある。玄関に入って靴をそろえることを親が指導するところから始める必要がある。

板橋の産直ネットワークというところで、地元農産物の販売を行った際、地元から中央大学に進学した学生を呼んで一緒に販売した。仕事が終わって帰るときに「大学卒業したら尾花沢に帰って来いよ。学んだことを生かして、お父さんお母さんが守ってきた地域に貢献するんだぞ」と伝えると、その学生は素直に「はい」と返事してくれた。大変うれしかったことを覚えている。子どもが少なくなっているので、自分の子どもだけでなく、地域の子どもは地域で育てる、周りの大人が声をかけ、注意をして、みんなで関わるのが大事だと感じた。

「北村山産直ネットワークビジネス」で高校の研修に参加した。非常に充実した内容で、私たちの大学時代の教育を超えたような内容に感嘆を覚えた。しかし、見学で教室に入った時に「先生、急に戸開けてびっくりした」と敬語を使わず言っていた。お客様が見学に来たのだから、時と場合でその対応を変えられるようになって欲しいと感じた。言葉遣いや、礼儀などを含めた教育を私たちも含めて行っていく必要があると感じた。

<佐藤委員>

先ほどから、技能五輪で優勝した、私ども社員にお励ましの言葉をいただき身に余る光栄である。山形学院高校在校中からチャレンジしている女子社員であるが、人を育てると

というのは時間が掛かるし辛抱もいる。その人のために私は女将として全身全霊を注いできた。私も大変うれしく思っている。また、山形県が団体第3位になったことは大変素晴らしいことであり感動した。

おもてなしは、聞く力、気づきである。そういう気持ちでお客様に接するように話している。お茶出し、急須でお茶を出すところ、番茶の色、煎茶の色から一つひとつ教え、お客様に叱られながら若い子が育っていく。自分も若い頃教わったことを、今は若い子に教えている。そうやって、伝えることは一つの大きなキーワードである。

もう一つ、メンター制について。少子化が進む中、地域で子どもを育てるということ、山形方式というか鶴岡が給食の発祥であるとか、教育のルーツが山形にある。

メンター制というか、やはり60を過ぎて、孫を育てるのも大事だが、孫だけではなくて、地域の子どものこれまでの知識や経験を活かして教えるということ、また、若い先生方も多いので、メンター制を取り入れていただきたい。家庭教育での躾はもちろんであるが、色々な家庭環境もあるので、そこを愛で埋めるような施策を執っていただきたい。そうすると、山形県は飛び抜けて良くなると思う。

<高橋委員>

私は農業を仕事としている身として発言させていただく。今活躍している農業者にどんな方がいるかという、問題を解決する能力がある人であり、そのために必要なものは、「問題が何かを探っていくためのコミュニケーション能力」や「どうやって考えていくのかの思考力」である。そして、行動に移すことができる人であると思っている。

そういう人がどういう経歴かという、逆説的になるが、農業と違う仕事を経験した人、農業高校、農業大学出身で活躍している人がいないという訳ではないが、違う勉強をしてきた方が非常に多いように感じている。

また、県内から外に出たことのある人も活躍している。農業が好きな人が農業高校に入ってくるが、農業が好きな人が農業を勉強するのは楽しいが、そこから革新的なことは起こりにくいのかなと思う。農業が嫌いな人であれば、この仕事どうやったら早く終わるか、といった考えになる。そのときにヒントになるのが他産業の仕事のやり方だったりするのではないかな。

ただ、最近の産業高校の取組みは素晴らしく、私が今話したことが昔のことなのかなと思うが、中身が伴っていないような気が少ししてしまっている。聞く力が必要だと思うが、全国の農業者と子ども達が集まる合宿において、最終日に何をするかということだけ目的を決めて、そこまでに何をしても良いという合宿で、考えさせることを大切にしている。それによって、大人があれこれ用意するのではなく、子どもに考える余地を与えることができる。その中で、聞く力を伸ばすために取り入れていたのが哲学的対話という手法である。40分だけだが、糸を巻きながらそれを持っている人の話を聞くというやりかたで、

一つのテーマで思うことを聞くということをやっていると、その後学校に行っても発言や質問をするようになったなどの効果があった。

産業高校にお願いしたいのは、産業毎の本質をきちんと子ども達に知ってもらいたいと思っている。産業の本質や喜びはどこにあるのか。そして、誇りとなって子ども達の中に根付くものがあれば、それが情熱となって職業を続けることにつながると思っている。

<板垣委員>

直接的に産業教育に携わっている立場から、話しをさせていただく。

まず、最初に県の様々な施策について、産業担い手育成事業では、中長期インターンシップや教員の技術研修を行っている。参加した生徒の表情がいきいきとしており、成果が大きいと感じている。

未来の産業人材キャリアサポート事業では、土木分野の人材育成になるが、3日間の研修を終えた生徒が、いきいきと活動しているという成果があり、是非継続していただきたいと思っている。

また、横山委員からもあったが、産業技術短大と連携させていただいており、課題研究の授業の中で、課題を見つけ、自ら解決する過程の中で、アドバイスをいただいている。非常にレベルが高くなり、そのことによって産業技術短大で学びたいという生徒が増えていく。

本校は、明るく元気な生徒が多く、挨拶も良く、何よりも出席率が99%を超えて非常に高い。学校とすれば、学習の成績も大事だが、楽しく学校に来ることが基本だと考えており、その上でどういうふうにな力をつけていくことができるか考えることが大切だと感じている。

最近の傾向として、全体としてやんちゃな生徒が少なく、おとなしくて素直な生徒が増えている。一方で、人間関係づくりが苦手な生徒が増えているように感じている。

中には、クラスに入れなかつたりする生徒が少しずつ増えている。また、経験が少ないので、手足を使って作業をすることが苦手な生徒も増えてきた。そういったこともあり、実習を多く取り入れて生徒を育て、コミュニケーションを図る場を授業の中でできるだけ増やすことが大切だということで、研究している所である。

今後、学校として大切なのは、指導力の向上と実習設備の充実である。本校は、本年度新校舎になったので、恵まれているが、古い設備や校舎のままの学校では厳しい状況もある。

また、教員のゆとりをどうやって確保するかも大切で、部活動やものづくりなど、ほとんど土日もなく働いている実情があり、代休も取れていない現状がある。

最後に、技能五輪で多くの方に技術・技能の理解が深まることにつながったのではないかと思っている。ただ、小中学生の見学者がいなかったのが残念で、是非見せてほしかった

た。

<大山委員>

中学校の立場からとなるが、ただ今、産業界の各分野で活躍されている方々のお話をお伺いし、今中学校で行っている学校教育で、どんなことをしていかなければならないか、考えさせられた。課題として受けとめた次第である。

はじめに、最上地区8市町村12校で行っている「もがみっこづくり」である。最上の子は、最上で責任を持って育てていこうということで、小中高を連携した教育を行っている。先日も新庄北高校において、最上地区高校、中学校、小学校の先生方が膝詰めで授業後の研究協議を行った。その中で、これから必要な「もがみっこ」の人間像について話し合い、人と人がつながりあう人間づくりが大切ではないかという話しになった。人や地域とつながり、学校もつながっていかなければならない。

次に、中学校でどんな授業が行われているかというところ、学びあいを中心とした協働学習が展開されている。その中で、仲間とつながって、支え合う関係づくりを学習の中で行っている。聞くことができ、初めて認め合う関係づくりに繋がる。そのためにも、先生方も外に出て、開かれた学校となる必要がある。

最後に、最上地区では、普通科志向が進んでいる。普通科で、つぶしが利く人間にさせたいという家庭の意向があるのではないかと。一方で、重機が好きで、現場で活躍するお父さんの影響を受けて将来その道に進みたいという生徒を担当したこともある。いろいろな産業があるということ、学校の生活を通して提供していきたい。

<斎藤直樹委員>

観光の状況を簡単に説明すると、高齢化の影響などで、国内市場は縮小している傾向にある。一方、インバウンドなど、外国人が増える傾向にあり、市場は日々多様化、変化している。

5年前にヒットしていたものが、全く受け入れられなくなったり、なくなったりしている。企画力、マーケット分析、ネットワーク形成力など、連携して課題に対応する力が必要になってきている。他の人と協働することがベースになると考えるので、就職後のトレーニングが中心となるが人材育成の事業を行っている。

学校時代に必要なこととしては、自分の身近な観光資源に触れて、よく地元のことを知って、山形を好きになることが大切ではないか。産業教育においても、こうしたことに積極的に取り組んでいただきたい。

<伊藤委員>

農林水産部においては、農業系高校と関係の深い農林大学校を所管しており、本県の農林業の担い手を育成している。約半数の学生が農業系高校から入学している。また、山形大学農学部と農林大学校、農業系高校が連携してシンポジウム等を開催し、それぞれの教育機関の特徴を活かしながら、農林業の担い手育成に取り組んでいるところである。

農業も平成22年で6万4千人の農業就業人口が、5年経った平成27年では約1万人減少し、5万3千人強となっている。また、高齢化率も約6割と進行している。

一方で、県別の食料自給率は全国3位の141%と、国全体の食料供給に果たしている役割は大きい。今後農業就業人口が減っていくという中で、重要な食料供給県の役割を果たしていくためには、限られた人員でも今の生産を維持していくということが必要であり、ICT技術の活用等により技術をマニュアル化して取り組みやすくするなど、スマート農業の実現に向けた研究開発を進めているところである。

農業教育に望みたいことは、新しい技術にも積極的に興味を持って取り組んでいける人材の育成、技術を知っているだけではなくて、考え、活用する力などもつける必要があると思っている。

最後に、上山明新館高校に県知事がつや姫の田植えで訪問した。その際、研究発表をしていただき、食用ほおずきの研究内容であったが、非常に積極的に取り組まれ、成果を地域に還元していた。非常に感銘を受けたところであり、農林大学校等でも参考としていきたい研究内容であった。

<長谷川会長>

今日午前中、私の銀行の取締役会を開催した。全員ポータブル端末で、ペーパーレスである。そういう時代である。

今、時々刻々と大きな変化が起こっていることを、是非自覚してほしい。

好きか嫌いかではなく、ペッパー君は私の銀行でも雇っている。そういう時代である。

さらに、AIが進展していく、恐ろしいほどの変化を認識させてほしい。

山形県は、産業構造の高度化に成功したと思っている。産業構造審議会の会長をしており、そういう認識をしている。さらに、県としてイノベーションをどのようにしていくのか、人をどうやって集めるのか、かなり強烈な壁があるので、それを支えるのが教育以外の何者でもない。私の銀行でも、採用する時は私が直接全員面接を行うが、向上心が大切である。県として、全体として向上心を持ち続けることができるかが、子ども達の向上心につながると考える。山形で一番でも全国では勝てない。相手は、日本であり世界であることを認識させてほしい。

<教育長>

貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。

今日のテーマは「社会の変化に対応する産業教育の在り方」ということであつたわけですが、技術の進歩への対応もさることながら、結局は人の力を育むことが重要ではないか。豊かな感性、他者を思いやる気持ち、意欲や関心、向上心、精神力、コミュニケーション力等をしっかり身につけることが重要であり、そのためには、家庭、地域での支えが必要である。そして、学校においては、教養教育を見直さなければならないと思つており、同時にインターンシップ、キャリア教育、現場における様々なコミュニケーションの力を維持していくことなど、今までやってきたことではあるが、これら第6次山形教育振興計画にも掲げることを、地道にやっていくことが何より大事だと感じさせていただいた。ただ今いただいた意見を改めて咀嚼しながら、これから産業教育を進める力にさせていただきたい。